
Dear. ~ 愛しい人へ ~

染井吉野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dear ～愛しい人へ～

【Nコード】

N9460P

【作者名】

染井吉野

【あらすじ】

「強く生きて」

亡くした恋人の言葉を守り、生きようとする少女サラ。しかし彼女の身に降りかかるのは、理不尽なイジメだった。時を止めてしまった少年と、進むことしかできない少女。二人を再び繋いだものは、一通の手紙だった。

第一話

良くんは言った。

「強く生きて。」と。

ねえ、良くん。

私、その言葉守れてるかな？

一、始まりの朝

十月九日。

私は十四歳になった。

とつとつ彼の歳に追いついてしまった。

嬉しいような寂しいような、何とも言えない感情が渦巻く。

「沙羅、起きてるの？早くしないと遅刻するわよ！」

写真を見ながらポーツとしていたら、一階のリビングにいる母さんに呼ばれた。

「わかつてるってばー」

下に向かつて叫んでから、もう一度彼の写真に向き直る。

薄い水色のフォトフレームに入れられた、穏やかな笑顔。

「おはよう、良くん。」

三年前から続く私の日課。

一番初めに「おはよう」を言うのは、必ず彼。

「沙羅――」

「はい――」

朝食と、母と、寝ぼけ眼の父の待つリビングへと階段を駆け降りる。

いつも通りの朝。

「行ってきまーす」

なるべく自然に、行きたくないのは悟られないように。

これ、朝の鉄則。今日も完璧。

いつも通り行こうとしたら「ちょっと待って」と母の声。

「何？」と答えながらも内心ドキドキ。

バレたかな？ と思っただけど違った。

「誕生日のケーキ、何がいい？」

流石母。覚えてた。

「んー、チーズケーキ！」

一声叫んで、もう一回「行ってきます」を言って家を出た。

正直足は重い。引き返してしまいたい。

でも母さんに心配はかけたくないし、良くんとの約束もある。

「強く」

呪文のように唱えて、通学路を踏みしめた。

第一話（後書き）

始めてみました連載小説です。

一話一話は短いですが、楽しんでいただけたら幸いです。

感想・評価はいつでもどんどんこいなので、よろしくお願いします。

第二話

二、戦場

朝の教室は煩い。

そう感じるようになったのは、結構最近。

誰とも言葉を交わさずに席に着くようになったのも、結構最近。いつも通り席に向かえば机の上に白い紙。

『ブス！』

そうマジックで殴り書きされた紙が、セロハンテープで貼ってあった。

周りのガヤガヤとした空気に、クスクスと笑い声が混じる。

「もつと語彙力ないわけ？」

そう言い捨てて、その紙をぐちゃぐちゃに丸めて、投げつけない衝動に駆られる。

ぐつと耐えて、紙をゴミ箱に捨てた。

このぐらいじゃ泣いてなんかやらない。

そんなことしたらあいつらの思いつぼだ。

そんなことしてやるもんか。

いわゆるイジメってやつが始まったのは一ヶ月前。二学期が始まってすぐだった。

別に何かしたわけじゃない。クラスに綺麗に溶け込めてたわけでもないけど。

ただ、暇つぶしのターゲットに選ばれてしまったただけだ。

きつかけは多分担任のたみちゃん先生の産休。

たみちゃんの持つ、柔らかいけれど有無を言わさない空気は、何だかんだでクラスの平和を守ってた。

二学期からの担任は、新人のやべちゃん。

こういう時、生徒はちゃんと先生を見ている。いざという時に頼れる先生と、そうじゃない先生。

残念ながらやべちゃんは後者だった。

どっか抜けてて、皆いじりはするけれど、頼りはしない。「やべちゃんなら何やっても大丈夫」って思い始めてしまった。

私は言うなれば、クラスのオモチャだ。退屈な日々を壊し、スリルある遊びをくれるオモチャ。

選ばれたオモチャに出来ることと言えば、耐えることだけ。

耐えて、あいつらの喜ぶような事はしてやらない。

そう決めた。

だけど、時々挫けたくなる。

逃げてしまいたくなる。

だから、そういう時は呪文のように彼の名前を唱えるんだ。

良くん、良くん…！

第二話（後書き）

第二話です。沙羅ちゃんの日常かな。

次から良君出てくるので、見捨てないでやって下さいm（――）m

第三話

三、良くん

良くんは本名を相模良夜くんさがみりょうやといい、私の幼なじみであり、恋人だ。

三つ年上で、病気がちではあったけど、すごく優しい人だった。私は何をするにも良くんと一緒だった。

お母さんに「沙羅は本当に良くんの事が好きねえ」とからかわれる事もあったけど、その度に全力で「うん！」と答えていた。

それだけ幼かった。

けれど、幼いながらに良くんの優しい笑顔を見るのが大好きだった。

良くんが恋人になったのは小四の春。

中学に入学したばかりだというのに、入院してしまった良くんのその病室で、想いを告げられた。

「僕は、沙羅が好き。兄弟みたいな好きじゃないよ。僕は沙羅と恋人になりたい。」

いきなりの事で驚いたけれど、気づけば私は頷いていた。

ただ、ただ、頷いていた。

あの時の良くんの顔は忘れられない。

「よっしゃ」と言ってくしゃりとゆがませたその顔は、すごく嬉しそうで、少し悲しそうだった。

後で良くんのお母さんから聞いた。

あの日、良くんはお医者さんから命の残量を告げられていたのだ、と。

それからの日々は楽しかった。

それまでも楽しかったけど、それ以上に楽しかった。

大抵は、良くん の病室か病院の屋上で他愛もないお喋り。

良くんが辛い時は、手を握りながら「早く治りますように」って
必死に祈ってた。

そうする事しか出来ない自分が悔しくて、泣きそうになる事もあ
ったけど、その度に良くんは私の頭をクシャクシャに撫でてくれた。
良くんの方が辛かっただろうに、笑みを浮かべながら。

キスすらしなかった幼い恋だったけれど、幸せだった。

恋、してた。

家族や友達とは違う、好きって気持ちを抱いていた。

幸せすぎて、気付かなかったんだ。

うつん。気付かない振りしてた。

だけど神様つてのは意地悪で、それは突然やって来た。

忘れもしないあの日。

良くんと恋人になって一年と二カ月。

良くんの十四歳の誕生日のすぐ後だった。

静かな雨が降ってたっけ……。

第三話（後書き）

幸せな思い出。でもそれは思い出でしかなくて……。

もうちょっと過去話続きます。

二人の歳が若すぎる気もするのですが、イジメって中学生ぐらいか
なつてのがあって、逆算するところなっちゃうんですよね……
年齢設定って難しい。

第四話

四、最期の言葉

日曜の朝。

「今日は一日中良くと一緒にいられる！」とわくわくしながら出掛ける支度をしていると、良くんのお母さんが訪ねてきた。真つ青な顔と慌てた様子に胸がざわついたのを覚えている。

「良の容体が急変したって連絡があつたの。沙羅ちゃんも、おいで。」
「
そう言うおばさんの声は、震えていた。」

それから良くんに会うまでの記憶は曖昧だ。

覚えているのは、おじさんの思い詰めた顔と、「大丈夫、大丈夫。」と繰り返しながら私の手を握っていたおばさんの白い手。

白い部屋で、色んな機会に繋がれた青白い良くんを見た時、一気に時間が戻ってきた。

「良くん、良くん！」
涙が溢れて止まらなかった。

お医者さんが、おじさんに何か話し掛けていたけれど、そんな事は耳に入らなかった。

ただ、名前を呼ぶことしか出来なかった。

どのくらいそうしていたのだろうか？ お医者さんが、良くんの人工呼吸器を外した。

うつすらと目を開けた良くんに、何故だか言葉が出なかった。

おじさんとおばさんに何か話し掛ける良くんを、ただぼつと見つめていた。

「サラ…」

少し掠れた声で呼ばれてハツとした。

「やだ。嫌だよ！ いっっちゃ嫌だ！ 沙羅のこと置いていかないで……」

最後の方は涙で言葉にならなかった。

もつと言いたい事はあつたはずだった。

言わなきゃいけないことがあつたはずだった。

けれども、それしか出てこなかった。

幼子のように泣きじゃくる私に良くんが言った最期の言葉は、「泣かないで」でも、「僕の方も生きて」でもなく、「強く生きて」だった。

「強く生きて、サラ。」

泣いてもいい。

だから、強く生きて。

生き抜いて。」

そう言いながら良くんは泣いていた。泣きながら笑っていた。

そつと閉じられていく瞳が、何故か印象に残っている。

瞳を閉じた良くんは、柔らかく、柔らかく、微笑んでいた。

あれからもう三年が経った。

私は、良くんの年に追いついてしまった。

そして、追い抜いていく。

良くんの声は、あの最期の言葉は、まだ耳に残ったままだというのに。

第四話（後書き）

良君…！泣

次から沙羅ちゃんが進みますー

第五話

五、涙

いつもより祝われることの少なかつた誕生日より早一週間。

状況は変わらない。寧ろ悪化していた。

何も言わないやべちゃんを良い事に、少しずつだが、表立った行動が出てきたのだ。

馬鹿じゃないの？

そんな事すれば、他のクラスの先生にもバレて、話が大きくなるだけなのに。

そう思う反面、奥底の方で「そうならば良いのに」と思っている自分がいて、ムカついた。

強く生きてと良くんに言われ、強く生きると彼に誓った。

それなのに、早くも挫折そうなる自分が腹立たしかった。

けれども、積もり積もったものは消えてくれることはなく、とうとうそれは限界を迎えた。

その日最後の授業が終わり、皆の気持ちが一番緩む時。

どこまでも暇な奴らは、この帰りのホームルームまでの僅かな時間ですえ利用する。

教室の端々から投げられる、紙やら悪口やらの山。

心を無表情の仮面で覆い隠し、シカトを決め込む。

……はずだった。

「死ねばいいのに。」

誰が言ったかも分からない小さな一言。それに続くキャハハつという笑い声。

それはいとも容易く私の仮面を崩した。

やってしまった。泣いてしまった…！

一度溢れだしたそれは、次から次へと流れ出し止まらない。最早止める術すら分からなかった。

帰りのホームルームのために教室に入って来たやべちゃんがビビっている気配がしたが、気にかけてやる余裕などなかった。誰かが適当に言い訳しているのを聞き流す。帰りの挨拶をきちんとなしたのもう意地だ。

何を言っても反応しないのがつまらなかつたらしい。気付いたら教室にいるのは私一人だけだった。

ようやく止まった涙のあとには、少しすっきりした感じと、虚しさが残っていた。

良くんは泣いてもいいと言ったけど、独りで泣くのは辛いだけだよ。

良くん、良くん。

君は今どこにいるの？

良くんがいない世界で生きる意味はどこにあるの？

横を向くと、傾き始めた日に照らされるベランダが目に入った。

何となく。

ただ何となく、ベランダの戸に手をかけた。

第五話（後書き）

溜まった想いは溢れ、崩れゆく。

この話に関してはもういうことではないかな。

もう少しお付き合い下さい。

第六話

六、手紙

ようやく涼しくなってきた風が緩やかに頬を撫でる。

手摺に掴まり、少し身を乗り出す。見下ろした校庭は、部活動に勤しむ生徒でいっぱいだった。

二年生の教室は三階。それなりの高さだ。

ここから飛び降りたら死ぬるかな？ 死んでやったら「死ねばいいのに。」って言った奴らはどんな顔するんだろう？

そんな想像を、もう何度したたろうか。

けれど死ぬ勇氣なんて欠片もなく、その度に「馬鹿みたい」と自分を笑った。

死んだら楽になれるんだろうなとも思ったけど、それが出来ないチキンな自分が、恨めしくて、愛しかった。

……でも、もう疲れた。

今なら飛べる。そう思う。

精一杯頑張ったんだ。

もう諦めてもいいだろうか？

君を求めていいだろうか？

「死んだら良くんに会えるかな？」

そう思った刹那、私の脳裏に白い封筒がよぎった。

何だっけ、コレ？

ボヤっとした頭でその正体を探る。

白い封筒。封筒。手紙……。

誰、からの……？

風が頭の中を駆け抜けていくような心地がした。そして、その先にあったのは、花のような笑顔だった。

鞆を掴んで教室を飛び出す。「廊下は走らない」とかいう規則な

んて吹っ飛んでいた。

思い出した。思い出した！

良くんからの最後の手紙。彼の病室から見つけたのだと、おばさんから渡された彼の遺書。

真っ白い封筒に「沙羅へ」と丁寧な字で書かれていた。

私は、まだあの手紙の封を開けていない。いや、開けられなかった。

開けてしまえば、まだ近くに感じている良くんが遠くへ行ってしまうので、怖くて、開けられなかった。

未開封の手紙は、机の奥にそっとしまった。

あれだけ開けるのが怖かったのに、今は無性に良くんの字に、言葉に、触れたい。

家までの道のりを体力が続く限り走った。

今の時間は、父も母も仕事に出ている。慣れているはずの鍵を開ける行為がもどかしかった。

靴を脱ぎ散らかし、二階の自室に駆け上がる。

鞆を放り投げ、机の引き出しを憩いよく開けた。

あつた…！

三年前と変わらない真っ白い封筒に丁寧な字。深呼吸をひとつして、震える手で封を開けた。

第六話（後書き）

ようやくラストに向かいます。あと二話程お付き合下さい。

第七話

七、『Dear・サラ』

おはよう、こんにちは、こんばんは。

サラがこれを読んでいるということは、僕は今サラの隣にいないだね。

何だか不思議な気持ちです。

最期の時、サラがそばにいるか、僕がうまく気持ちを伝えられるかわからないので、今この手紙を書いています。

言いたい事も、聞いてもらいたい事も、たくさんあるんだ。長くなるだろうけど、最後まで読んでほしい。

……改めまして。

僕のいない世界といのはどうですか？

何か変わっているだろうか。

それとも、何も変わっていないかな？

サラは元気？

泣いては、いない？

サラのことだからきつと泣いてるね。

泣き虫だもんなあ、サラは。

でも、泣いたっていいよ。嘆いたっていいよ。負けたっていいから、強く生きて。

雑草みたいに、しぶとく、強く、生き抜いて。

自分の命を自分で捨てない強さを持って。

僕に分まで生きてなんて言わない。

僕の年より生きてはほしいけど。

サラは、サラの命を生きて。

好きな人見つけて、幸せになってほしいな。

僕のこと忘れてたっていいからさ。

…ごめん、嘘。

忘れないでほしい。

サラだけには忘れてほしくない。

ワガママ言っでごめん。

困らせてごめん。

でも僕の恋人はサラだけだから。

サラには、ちゃんと好きな人見つけて幸せになってほしい。

でもどうか、僕っていう存在いた事は忘れないでいて。

たまに思い出すだけでいいからさ。

そしたら、僕はサラの中で生き続けられるから。

サラちゃん、サラ、沙羅、さら。

何度君の名前を呼んだらう。

何度君の名前を呼べたらう。

僕はこれからも君の名前を呼ぶよ。

サラには聞こえないかもしれないけど。

サラが辛い時、嬉しい時、悲しい時、楽しい時、いつだって呼ぶよ。

だからサラも時々呼んでほしいな。

良くんって。

覚えてる？

いつだったか、サラが僕の名前が好きだって言ってくれた事。

「良くんの名前はお星さまが見えるの！キラキラしてて、あったかいんだよ。だからサラは良くんの名前大好き！」

君が言ってくれたこの言葉は、いつも僕の心にあって、思い出しては嬉しくさせた。

あの時は照れくさくて、小さく「ありがとう」としか言えなかったけど、本当に感謝してる。

改めて、ありがとうございます。

サラにはいっぱいありがとうございますって言いたい。

生まれてきてくれてありがとうございます。

僕と出会ってくれてありがとうございます。

名前を呼んでくれてありがとうございます。

恋人でいてくれてありがとうございます。

辛い時傍にいてくれてありがとうございます。

一緒に生きてくれてありがとうございます。

本当はもっとサラと生きたかった。

もっと話して、触れていたかった。

神様って意地悪だよ。

こんなこと言ったら怒られそうだけど。

サラと過ごせた日々、特に告白してからの日々は本当に幸せだった。

一生で一番幸せだったと思ってる。

ホントだよ？

サラといるだけで、どうしようもないくらい幸せだった。

ありがとうございます。

救われた気がするんだ。

サラといた時間は思い出に変わるけど、僕は絶対に忘れない。

思い出しては、サラの幸せを願うよ。

最後にもう一度お願い。

強く生きて。

涙しながらも、折れない強さを、しぶとさを持って。

サラだけの人生を生きて。

大丈夫。

サラは強くて優しい子だって僕が保証する。

それでもどうしても辛い時は、空を見て僕を思い出して。

僕はいつだってサラを見守っているから。
約束する。

Dear・愛しい人
いつまでも、愛してる。

相模良夜

第七話（後書き）

一番難産だった話です。遺書ってものを死んだ人の側から書くのが難しくて難しくて…。

少しでも良君の気持ち伝わったら幸いです。

第八話

八、Dear…

読みながら視界がぼやけた。

手紙を濡らすまいと、何度も何度も拭ったが、想いと一緒に溢れて止まらなかつた。

嗚咽混じりに、何度良くんの名前を呼んだらどうか。少しは彼に届いたらどうか。

良くんはこの手紙をいつ書いたのだろうか。死を宣告された日？それとも亡くなる間際？

何度も書き直したのかな。サラッと書けてしまったのかな……。色々な考えや思いが頭を巡る。

諦めかけていた自分を恥じると同時に、胸にのしかかっていた重石が軽くなったのを感じた。

良くん、私強く生きるよ。生き抜いてみせる。

無性に彼に伝えたくなった。

私だって、言いたい事も、聞いてほしい事もたくさんある。

ありがとうって言いたい。良くんの最後の時間を私にくれてあげがとうって。

それから、忘れる訳ないよって。これから好きな人が出来るかなんてわからないけど、ずっとずっと良くんが好きだよ。大好きだよ。どうすればあなたに届くだろうか。

はっと思いついて、机の中を探る。あつた。

昔誰かからもらったキャラクターのレターセット。ちょっと幼い気もするが、許してもらおう。

書き終えたらどうしようか。お墓参りに行こうか。紙飛行機にして飛ばすのもいいかもしれない。

そんなことを考えながら、そつと袋から便箋を出し、ペンを取る。

さあ書こう！ と意気込んで、手が止まった。

何を書こう。言いたい事が、伝えたい事が、頭の中で渦を巻く。

何を…何を……。

考えた末に辿り着いた言葉に小さく笑う。そうだ、これがいい。

ゆっくりと紙にペンを下ろし、滑らせる。これ以上ないくらいの

愛情を込めて。

「Dear・良くん」

第八話（後書き）

完結です！

ここまで読んで下さってありがとうございます！

もしよかったら感想等下さいm——m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9460p/>

Dear. ~愛しい人へ~

2011年1月6日00時10分発行